

# 2021年度国際人道法模擬裁判・ロールプレイ大会報告書

2021.12.7

法学部根岸ゼミの学生によって構成されるチームは、11月27日(土)に国際人道法模擬裁判大会に、また、11月28日(火)にロールプレイ大会に出場しました。

国際人道法模擬裁判・ロールプレイ大会とは、毎年冬、武力紛争の現場で実際に適用されるルールの理解を深めることを目的とした大会です。模擬裁判大会では、武力紛争下の事象に関わる設定問題に対し、検察側と弁護側に分かれて弁論します。ロールプレイでは、武力紛争下におけるさまざまな架空の状況下で、人道支援団体をはじめ民間人、武装勢力など、与えられた役割を演じます。出題を含め、大会内の言語はすべて英語です。コロナ禍のため、今年度はオンラインでの開催となりました。

今年度は、メンバー全員で問題文発表がなされた8月23日(月)から約3ヵ月間で、メモリアルと呼ばれる準備書面作成を行い、大会本番の口頭弁論に向けて、メンバーと切磋琢磨しながら、自分自身と戦いました。限られた時間と人数で、「自分のできること」に対して、ひとり一人が取り組むことで、互いの足りない部分を補いあい、最後まで走りぬきました。

一人ひとりにとって、今回得た知識、能力は、今後の就活や来年度の大会に向けて、自分自身のスキルアップへつなげるための非常に貴重な機会となりました。今後とも、西南学院大学根岸ゼミの活躍をご期待ください！



## <模擬裁判出場者>

池田若葉(国際関係法学科3年)・上野大我(同2年)・小野桃果(同3年)・角駆地(同3年)

## <ロールプレイ出場者>

原彩夏(国際関係法学科1年)・矢嶋優奈(フランス語専攻3年)・楊懿之(同4年)

## - 2021年度国際人道法模擬裁判大会出場者のコメント -

今回のICRCで学んだことは、裁判官との答弁の中で、はっきりと自分の立場を示さないと、伝わらないことです。裁判官がyesかnoを聞きたい質問に対して回りくどい説明をして結局どっちなのかわからない状況になり、もう一度質問されるようなことがありました。今回の模擬裁判のような、より国際的な基準で行われる場において、YesかNoかをはっきりさせずにいることは通じないと感じました。日本人特有の思考で、回りくどくても説明すればわかってくれると考えるのではなく、明確に立場を示すことが大事だと思いました。

本番当日の緊張した空気の中で自分の最高のパフォーマンスをすることと他大学の同世代のレベルの高さに刺激を得られ、本当にいい経験になりました。この3ヶ月間一緒に頑張ってきた仲間にも感謝したいです。

(国際関係法学科3年・池田若葉)

当日の模擬裁判では自分の英語の出来なさが良く目立ちました。

がむしゃらに弁論をできたのは唯一の成長なのかなと思います。

メモリアル作成時は、論を立て、どのような解釈を使ったかなど1からのメモリアル作成になりました。先輩方にアドバイスを聞きながら細々としたルールも含め、なんとかメモリアルを形として提出することが出来ました。

メモリアル作成時に自分の該当箇所と池田さんのcount 5の原告を並行してできていれば、弁論の際慌てる必要もなく、count 5の原告に対して、より良い論づくりの手助けができたのではないかと思います。

(国際関係法学科2年・上野大我)



今回のICRC模擬裁判の経験を通して、相手にどのように伝えるかということの難しさを改めて感じる機会となりました。メモリアルを作成する際は、限られた文字数の中でどう伝えるか、口頭弁論の際は、限られた時間の中でどのようにして相手を説得するか、双方において、要点を抑えて物事を説明し、説得するということが問われる場であったと思います。

また、英語でのコミュニケーションが必要とされ、相手の質問の意図が理解できない場合であっても、自分自身がどこまで理解できていて、どこから理解できていないのかを話すことにより、相手のキャッチボールがはじまり、議論を深めるということの大切さを改めて感じる機会となりました。人に伝えることの困難さを肌で感じる事ができた貴重で有意義な機会でした。

(国際関係法学科3年・小野桃果)

今回、大会においては被告を担当させていただきましたが、全国の大学から参加しているためハイレベルな議論が飛び交い圧倒されたときもありました。しかし、実際に今まで狭かった物事の価値基準が広くなり、自分自身の現在地を知ることができ学生生活の中で良い経験をしたと感じ、私が弁論できたことも成長を感じとれる一面もありました。そんな中、模擬裁判に対する準備不足もあり目標を達成することはできませんでしたが、裁判官から質問に対して自分が何を伝えているのか分からない状況もあり、英語や日本語に関わらずどう表現すれば伝わるのかという言語化能力や臨機応変能力を更に鍛える必要がある課題を見つけることができ有意義な時間になったと思っています。これからはキャリア形成に向けて課題点を改善できるように精進させたいと思いました。

(国際関係法学科3年・角駆地)

## - 2021年度国際人道法ロールプレイ出場者のコメント -

ロールプレイング大会への参加を通して、右も左も分からない状態でゼロから学ぶとき、一度なにか試してみることが重要だと学びました。私の場合、国際人道法や国際赤十字の役割も掴んでいない状態での参加でしたが、事実文を様々な視点で一度読んでみることで分からない点をより明確にすることができました。漠然とした「分からない」よりも、理解するために何が必要かを洗い出したほうが、得られる知識はより実用的でかつ明確になります。英語面でも同じで、単語や文法を詰め込むよりも、「この場面だったら何を話すべきか？」と想像して必要な要素を集めることで「会話」につなげることができました。また、議論する段階では、一場面や個人の考えを図示することで内容がより速く進展することも学びました。しかし、本番はやはり緊張するもので、思うように意見を伝えることはできませんでした。頭の中にあることを素早くアウトプットすることが今後の課題です。

(国際関係法学科1年・原彩夏)

与えられた役割の立場から課題に取り組む必要のあるロールプレイング。「ここまでは主張できるが、これ以上は権利がないから踏み込めない」といった法という見えない制限に縛られた状態で、自身の考えを主張する事が難しかったです。しかし、この制限を守るからこそ、国際関係が維持されるのだと実感しました。また、今回が大学生活の中で最も真摯に英語に向き合った時でした。2ヶ月近く集中的に英語のトレーニングをし、練習以前よりも1テンポ早いアクションとレスポンスができるようになりました。しかし、それは大会では通じず、留学生チームとの会話にはほとんど入れない状態でした。後に対戦した留学生チームの優勝が決まった事もあり、世界の上位層のレベルを知ることができた大会でした。決して満足のいく結果で終わることはできませんでしたが、2ヶ月間大会に向け頑張れたことは私にとって良い財産となりました。

(フランス語専攻3年・矢嶋優奈)

昨年は模擬裁判に参加させていただいて、新たな地平を見ることができた。今年は異なる景色を見たいと思い、参加者ではなく裏方として後輩をサポートするという形で大会に関わりたかったがメンバーの脱退などで結局、矢嶋さんや原さんと一緒に大会に望むことになった。昨年と同様、たくさん成長することができた。同時に、目の前に果てしない道が広がった気がする。中国、日本の常識は世界では通用することができないし、自分が慣れ親しんだ環境や言語を依存することの危険さを薄々と感じた。今後自分の課題は「世界に挑むこと」であれば、英語を駆使しなければいけない。難しいが、無理ではない。目指していきたい。世界の「普通」を知ったことはこの大会に参加して得た貴重な財産である。同時に大きな壁が存在することを感じた。だが、知らなければどのように超えていくのかをわかるはずがはい。参加して本当によかった。最初、裏方になると考えたのは、「自分を成長させてくれたの大会をぜひ後輩たちにも経験してもらいたい」とい先輩としての思いはあったが、チームメイトが脱退して大会出場が危ういになった時に身を張ることもまた先輩の務めである。参加することに迷いがなかった。参加者としてやる以上、同期の皆が取り組んでいるプロジェクトにほとんど取り掛かることができず、迷惑をかけてしまったことは痛恨の極みだが、わがままの許してくれた4年生に感謝を申し上げたい。最後は、矢嶋さんと原さんがメンバーではなかったら参加することははずなかつた。不出来な自分を最後まで信頼してくれた矢嶋さんと原さんに感謝する。ほんとうにありがとうございました。

(フランス語専攻4年・楊懿之)